

「中風の人3」

マルコの福音書 2:10~12

はじめに

イエシュアのみもとに連れて来られた、中風という病を患ったひとりの人。四人の人の手によって担ぎ込まれたこの人は、イエシュアがおられた家の屋根に穴を開け、そこから中につり降ろされるという形で連れて来られました。前回、また前々回のメッセージにおいて、この奇妙な一連の出来事には、「地の四隅」すなわち世界中に散らされたイスラエル、ユダヤ人たちが、そこから再び集められるという神のご計画、つまり…

【新改訳 2017】

イザヤ書

11:12 主は国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。

という預言が「型」として表されていること、そしてその成就是、神の御子、メシアであるイエシュアによって成し遂げられることが指し示されていると考えられることを述べてきました。今回はこの出来事の最後の部分、イエシュアが実際にこの中風の人を癒された出来事が記された箇所を目を留め、そこに指し示された神のご計画を思いめぐらしてみたいと思います。

1. 罪を赦す

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:10 しかし、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために——。」そう言って、中風の人に言われた。

イエシュアはご自分を指して「人の子が地上で罪を赦す権威を持っている」と言っておられます。イエシュアは「罪を赦す」ことがおできになる御方ということですが、この「罪を赦す」とは本来、どのようなことを意味していたのでしょうか。「(罪を) 赦す」という意味のヘブル語サーラハ(פָּדוּ)は、聖書において出エジプト記 34:9 で初めて使われた言葉で、イスラエルの罪が赦されることを指し示しています。

【新改訳 2017】

出エジプト記

34:4 そこで、モーセは前のものと同じような二枚の石の板を切り取り、翌朝早く、【主】が命じられたとおりにシナイ山に登った。彼は手に二枚の石の板を持っていた。

34:5 【主】は雲の中であって降りて来られ、彼とともにそこに立って、【主】の名を宣言された。

34:8 モーセは急いで地にひざまずき、ひれ伏した。

34:9 彼は言った。「ああ、主よ。もし私がみこころにかなっているのであれば、どうか主が私たちのただ中において、進んでくださいますように。確かに、この民はうなじを固くする民ですが、どうか私たちの咎と罪を赦し、私たちをご自分の所有としてくださいますように。」

これはモーセによってイスラエルの民が再び「二枚の石の板」に記された「十戒」とも呼ばれる律法を受け取る場面です。「前のもの」一度目のものは、彼らの犯した偶像礼拝の罪のために壊されてしまいましたが（出エジプト記 32:19）、これは確かにイスラエルの民に与えられました。そこでモーセが祈った言葉の中に、聖書で最初のサーラハがあります。それは「うなじを固くする民」、かたくなに神に逆らうイスラエルの民が、ついには彼らの心に律法「二枚の石の板」が書き記されて、「ご自分の所有」すなわち神のもの、聖なる民とされる、変えられるという神のご計画を指し示していると考えられます。以下のように預言されている通りです。

【新改訳 2017】

エレミヤ書

31:33 これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである——【主】のことば——。わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

この預言、契約の成就が、サーラハ「罪を赦す」という言葉の持つ、その本来の意味であり、指し示された神のご計画であると考えられます。このように「罪を赦す」とは、イスラエルの民が神の民となることを指し示していると考えられます。そしてこのご計画は、天において成就するものではなく、私たちが今生かされているこの「地上」において現わされる、成し遂げられるものであるため、イエシュアは単に「罪を赦す」ではなく、「地上で罪を赦す」と言われたのだと考えられます。

2. 言う

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:11 「あなたに言う。起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい。」

次にイエシュアは中風の人に向かってまず「あなたに言う。」と言われました。アーマル(אמר)というヘブール語の動詞がここに使われています。この言葉が本来持っている意味は、神が「言う」というものであり、人のそれとは次元が違います。人の「言う」は、不確かなものが多く、誤りも多く、つまり言ったとおりにならない、言ったとおりでないというものですが、神のアーマル「言う」には、言った

とおりに、必ずそのようになるという意味があります。アーマルの最初の言及である創世記 1:3 にその事実が表されています。

【新改訳 2017】

創世記

1:3 神は仰せられた。「光、あれ。」すると光があった。

神は「**仰せられた。**」と訳されているのが聖書で最初のアーマルです。神が「**光、あれ。**」とアーマル「**言う**」と、全くその言われた通りになったのです。しかしここで神が仰せられた通りになるには一つの条件があります。それは「**光**」が神の御言葉に全く聞き従うということです。なぜなら神はここでご自分の御手で「**光**」をつくられたとも、またこれを捕らえて闇から引っ張り出したのでもなく、ただ命じられただけだからです。つまり「**光**」が神のアーマルに全く聞き従ったことで、その通りになったのです。イエシュアは中風の人に向かって「**あなたに言う**」と言われました。そして次の節でこの人はイエシュアの言われたその通りに全く聞き従っています。この中風の人とはイスラエルの民、ユダヤ人を指し示した「**型**」であると述べました。ですからここには、イエシュアご自身が御父である神に対してそうであるように、イスラエルの民がイエシュアの「**言う**」御言葉に、全く聞き従う民となる、心に神の御言葉、律法が書き記された神の所有、神の民となることが指し示されていると考えられます。

3. 起きなさい

そしてイエシュアは中風の人に向かって「**起きなさい。**」と言われました。クーム(קום)という動詞がここに使われています。

【新改訳 2017】

創世記

4:8 カインは弟アベルを誘い出した。二人が野にいたとき、カインは弟アベルに**襲いかかって**殺した。

これは最初の人アダムの二人の息子、兄「**カイン**」とその弟の「**アベル**」についての記述ですが、兄の「**カイン**」が弟「**アベル**」に「**襲いかかって**」と訳されているのが聖書で最初のクームです。「**カイン**」は、自分は神に受け入れられず、「**アベル**」だけが神に受け入れられたことに怒り（創世記 4:5）、妬みによって彼を殺してしまいました。イエシュアはこのアベルの死について以下のように語られています。

【新改訳 2017】

ルカの福音書

11:50 それは、世界の基が据えられたときから流されてきた、すべての預言者の血の責任を、この時代が問われるためである。

11:51 **アベルの血**から、祭壇と神の家の間で殺されたザカリヤの血に至るまで。』そうだ。わたしはおまえたちに言う。この時代はその責任を問われる。

このように、イエシュアはアベルの死「**アベルの血**」は、「**世界の基が据えられたときから流されてきた、すべての預言者の血**」であると語っておられます。ですから「**起きなさい**」と訳されたクームの持つ本来の意味には、イスラエルの民がその歴史の中で、神に遣わされた多くの預言者たちの言葉、すなわち神の御言葉を拒絶し、これに聞き従わなかった事実と、そしてついには神の御子であるメシアであるイエシュアさえも否定し、十字架につけて殺してしまうことが指し示されていると考えられます。

4. 寝床を担いで

次に「**寝床を担いで**」という言葉についてですが、ここには「上げる、運ぶ」という意味の動詞ナーサー(נָסַר)が使われています。最初の言及は創世記 4:7 です。

【新改訳 2017】

創世記

4:6 【主】はカインに言われた。「なぜ、あなたは怒っているのか。なぜ顔を伏せているのか。

4:7 もしあなたが良いことをしているのなら、**受け入れられる**。しかし、もし良いことをしていないのであれば、戸口で罪が待ち伏せている…

これもまた最初の人アダムの二人の息子、カインとアベルの出来事です。「**受け入れられる**」と訳されていることがナーサー本来の意味を指し示しています。それはすなわち「**良いこと**」、神の目に正しい行いをする者となり、神に「**受け入れられる**」こと、神の所有、神のものとなるということ、それが「**寝床を担いで**」という言葉に表された、ナーサー本来の指し示す意味であると考えられます。ちなみに「**寝床**」と訳されたミシュカーヴ(מִשְׁכָּב)は本来、性行為のような親密な交わりを指し示しており、互いに「**受け入れ**」合うという意味において、ナーサーと同じ意味を持っていると考えられます。イエシュアは中風の人に「**起きなさい**」と言われ、そして「**寝床を担いで**」と言われました。これをヘブル語で、しかもその言葉の本来の意味において解釈するならば、「**イエシュアを殺しなさい**」そして「**神に受け入れられなさい**」と命じられていると考えられます。これは一見、到底理解し難いメッセージです。しかし人が神に受け入れられ、神のものとなるためには、罪の問題が解決されなければなりません。罪が赦されるためには、その罪を犯した人自身が死ぬか、あるいはいけにえ、すなわち罪のないものがその罪の身代わりとなって殺されるしかないのです。このように神のご計画は、イエシュアがイスラエルの民の罪のためのいけにえとなって殺されることだということが、この「**起きなさい。寝床を担いで**」というイエシュアの御言葉の中に指し示されていると考えられます。

5. 家に帰りなさい

イスラエルの罪のためのいけにえとしてのイエシュアの十字架の死、これによってイスラエルの全ての罪は赦され、神の所有の民となります。しかしイスラエルの民は、一体何のために神の民となるので

しょうか。その目的が、この「家に帰りなさい」という御言葉の中に表されていると考えられます。「帰りなさい」と訳されていますが、ここにはハーラフ(הָלַךְ)「歩く、行く」という意味の動詞が使われています。その最初の言及から、本来の意味を考えてみましょう。

【新改訳 2017】

創世記

2:10 一つの川がエデンから湧き出て、園を潤していた。それは園から分かれて、四つの源流となっていた。

2:11 第一のものの名はピション。それはハビラの全土を巡って流れていた。そこには金があった。

2:12 その地の金は良質で、そこにはベドラハとシヨハム石もあった。

2:13 第二の川の名はギホン。それはクシュの全土を巡って流れていた。

2:14 第三の川の名はティグリス。それはアッシュルの東を流れていた。第四の川、それはユーフラテスである。

エデンの園から湧き出た「川」、それが「四つ」に分かれ、全地に「流れていた」という記述に聖書で最初のハーラフがあります。これがエデンおよび全地を潤し、そこに生きる動植物を養い、良質の金や宝石までも生み出していたことが記されています。このようにハーラフとは本来、全地とそこに生きるすべてのものの祝福と繁栄をもたらす存在を指し示すような言葉であると考えられます。このように全世界を祝福するために、神がお選びになった一つの存在、それはアブラハム、イサク、ヤコブの子孫であるイスラエルの民であると考えられます。

【新改訳 2017】

創世記

28:12 すると彼は夢を見た。見よ、一つのはしごが地に立てられていた。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた。

28:13 そして、見よ、【主】がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。

このように「帰りなさい」と訳されたハーラフという言葉には、イスラエルの民によって「地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。」ことが指し示されていると考えられます。これが成就する世界が神のご計画の完成である「神の国」であり、神がイスラエルの民をお選びになった理由、目的であると考えられます。ちなみにイエシュアは中風の人に「家に帰りなさい」と言

われましたが、「家」と訳されているヘブル語のバイト(בַּיִת)は、本来は創世記に記された、ノアの箱舟の中に作られた部屋の中、内側を指し示す言葉です。

【新改訳 2017】

創世記

6:13 神はノアに仰せられた。「すべての肉なるものの終わりが、わたしの前に来ようとしている。地は、彼らのゆえに、暴虐で満ちているからだ。見よ、わたしは彼らを地とともに滅ぼし去る。

6:14 あなたは自分のために、ゴフェルの木で箱舟を造りなさい。箱舟に部屋を作り、内と外にタールを塗りなさい。

かつて神は、全地に及ぶ大洪水によって地上のすべての生き物を滅ぼし尽くされました。しかし「箱舟の部屋」の「内」バイトに入ったノアと彼の家族、及び動物たちだけは救われました。このように「家」と訳されたバイトとは本来、救われること、滅びを免れ、生かされることを指し示していると考えられます。私たち人にとって、イエシュアによって成し遂げられる、イスラエルの民に対する神のご計画の成就、その完成である「神の国」に入ること以外に、滅びを免れる術はありません。「家」と訳されたバイトですが、それは人が生きることができ、数ある場所の一つというものではなく、この「神の国」以外に救いはないということが表された、ただ一つの救いを指し示した言葉であると考えられます。

6. 驚く

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:12 すると彼は立ち上がり、すぐに寝床を担ぎ、皆の前を出て行った。それで皆は驚き、「こんなことは、いまだかつて見たことがない」と言って神をあがめた。

はたしてイエシュアが言われた御言葉の通りに、中風の人の上にそれが起こりました。「それで皆は驚き、」とあります。イエシュアの御言葉一つで、中風の人が癒されたのです。それを目の当たりにした人々の反応としては当然でしょう。しかしこの様子にも意味があると考えられます。ヘブル語でこの「驚く」ことをターマ(תָּרַם)と言います。この最初の言及は創世記 43:33 です。

【新改訳 2017】

創世記

43:33 彼らはヨセフの前で、年長者は年長の席に、年下の者は年下の席に座らされたので、一同は互いに驚き合った。

これはヤコブ、すなわちイスラエルの 12 人の息子たちの物語の一場面ですが、ここで自分たち兄弟のことをよく知らないはずの人（実際は兄弟のヨセフでした）が、自分たちの年の順を知っていたことに

対して「**驚き合った**」という箇所、聖書で最初のターマが記されています。ですからこの言葉は本来、イスラエルの子どもたちが覚えられ、数えられ、よく知られていることに対する驚きを指し示したものであると考えられます。11番目の息子であったヨセフは、兄たちの怒りを買って、エジプトに売り飛ばされ、家族と離れ離れになりました。しかしヨセフはエジプトで栄え、その国の支配者となっても家族を忘れませんでした。ここに神がたとえイスラエルの民に拒絶されても、この民を覚え、決して見捨てられないというメッセージが表されていると思われます。このように、ヨセフの前にその兄弟たちが再び集められたように、神の御前にイスラエルの民は覚えられ、必ず再び集められることが、この「**皆は驚き**」と訳されたターマという言葉の中に表されていると考えられます。

そしてまた中風の癒しを目撃した人々は「**神をあがめた**」ともあります。シャーヴァハ(נִשְׁבַּח)「ほめ歌う、賛美する」という意味の動詞が使われています。

【新改訳 2017】

I 歴代誌

16:34 【主】に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。

16:35 言え。「私たちの救いの神よ、私たちをお救いください。国々から私たちを集め、救い出してください。あなたの聖なる御名に**感謝し**、あなたの誉れを勝ち誇るために。」

16:36 ほむべきかな、イスラエルの神、【主】。とこしえから、とこしえまで。それから、民はみな「アーメン」と言い、【主】をほめたたえた。

これはダビデが神の箱をエルサレムの街に運び入れ、幕屋の中にそれを置いた時に歌った歌の一節で、「**聖なる御名に感謝し**」と訳されている箇所に、聖書で最初のシャーヴァハがあります。このようにシャーヴァハは本来、神がイスラエルの民を「救い」、「国々から…集め」ることを指し示しています。ヘブル語で「**救う**」という意味の動詞ヤーシャ(יָשַׁע)は、イエシュア(יֵשׁוּעַ)の御名の語源です。ですからイエシュアによってイスラエルの民が再び集められることが、この「**神をあがめた**」と訳されたシャーヴァハの持つ本来の意味にもそれが指し示されていると考えられます。

7. どこを取っても

世界中に散らされたイスラエルの民が、イエシュアによって集められるその時、イスラエルの民によって地上の全ての国々が祝福される「**神の国**」が、この地上に建てられるという神のご計画が、イエシュアが中風の人を癒されたこの出来事の中にも、やはり表されていました。この中風の人についての出来事を今回のメッセージを入れて三回にわたって細かく見てまいりましたが、どこを取っても「**神の国**」、イエシュアによって成される、イスラエルに対する神のご計画が表されていました。今日もこのようにして、御言葉の中に指し示された「**神の国**」に目を留め、そのご計画に思いをめぐらすことができたことを、心から感謝します。これからもますます「**神の国**」に思いを馳せる者とさせていただきたいと願います。御国が来ますように。